

第四節 傳 説

あつたバレンを々家に配り、益々蠶が上乘であるやうにと祈るのもある。

幼時母や祖母から寝物語にきかされた故郷の傳説程、年老ひるまでなつかしく、純な幼心を蘇へらせてくれるものはない。年と共に荒みゆく心の緩和劑ともなり、郷土愛の源泉ともなるは、故郷の傳説である。かうした尊い傳説も次第に村の人々からも忘れられ、顧みられなくなつてゆきつ、ある現狀であるやうだ。本村内に傳へられる傳説も語り誤られ、傳へ誤られつ、失はれ、僅かに左の二三話を残すのみとなつた。この中でも山姥物語は本村に直接關係があり、本格的な傳説として現存してゐるがこれも多くの異説がある。別項は古書によつて採つたものである。

一、山 姥 の 傳 説

郎等は彼に喰たると思ひ大かりまたを取り出し蛇の細首をねらひて射る。手き、にてはある。はづれず淵にはばかり程の大蛇を射殺す。かゝるところに雷電俄かにして大雨降出す。新藏少しもおくせず刀を抜いて蛇の腹を切破り、すかして見れば彼の郎等あり。里の人恐れてちゆうし口に伴ひ集る。新藏殿は人間にてはあるまじ、如何なる神佛の再來にてか渡らせ給はらん。其男息ある中に我里に送るべしとて、乗物を板で羽黒の里に送りけり。羽黒の里に屋せゑの木とい

ふ所あり。こゝにて此の男息絶へたり。さらばこゝに埋めんとして塚をやせゑの木につき誠には末代の人に勇知しめんか。新藏この事良とも悪くとも辨へず常のくふう只殺生のみ。されば優しき心其中にあり。

或時八月中頃犬も數多引連夜輿行にとて出られる。羽黒の川上に富士山本宮山といふあり。此の間流る、川を幼川といふ。大蛇の住む淵あり。くらが淵といふ。人の通ふこと稀に新藏は蛇の住む所とも思はず常に行通ふ。今宵は満月なれば本宮山の深谷より村迫りし本宮の社の前に出で其の尾裂けり二ノ宮の明神の後の山に出づべしと神野の里に迫し不可谷の瓦つるを上りけり。されども狸にも鹿にも非ず。むなく漸々本宮の社近く上りけり。こゝにて三匹の犬先へ行かず。新藏が股ぐらにちみみて身の毛を立て悲む。新藏心に思ふ様、先に狼たるや犬のおぢ恐る、こと別儀あらじと犬を我が先に立て行く程に犬も後につきておづ／＼のぼりけり。本宮の社近くなりて新藏社を見ればほの／＼と火あり。不思議さよと思ひ踏止まり心をつけて見る。六尺計なる古行燈に燈火かすかに側に居丈一丈ばかりなる女かすかに長髪を梳る。又脇には袴着たる男あり、これも居丈一丈計に見へたり新藏思ふやう誠やらん。此の山に山姥の住と聞く。非行者の者の心を感じて業とし居れば惑を知ぬいてか、狼射はよと思ひ、惡魔戒の白笹に山鳥の羽の矢をおし分けて女の梳る胸先をちゆつと放つ。手ごたへして當る。行灯消へたり。山の震動して雷の如くなり、くらが淵の上谷の底まで鳴渡るとおぼへたり。夜の明けけるを待ちて大きな木の本に立寄り夜を明かしけり。夜明けて拜殿にさしか、り見るに、黒き血流れくらが淵の方へ行きたる跡あり。不思議に思ひこの血のとめて見れば血を流れ居りたる道。大木にても小木にても、大石にても皆々崩れて谷にかたぶけり。新藏思ふやう如何なる姓ある者にてあらん。變化の者ならば矢の

あたることもあるまじ。宿にかへりて一族一門に語り聞かせ此の血を留て見んと思ひ、犬も呼集め我里にぞ歸る。扱て其の里の人残らず呼集めこのことをありのまゝに語る。心ある人同道して本宮の峯に集り其處を見るに語に少しも違はず。それより里へ歸る山道あり。血この道を直に流れて安樂寺といふ里の中を通りて羽黒の里の南、新藏の居所の成海といふ所にさして此の血あり。人々不思議の思ひをなし、とめ行程に成海の里の南に青塚といふ大きな塚あり。其の北のはずれに大道あり。これをさして血こぼれゆく。萬町が坪の繩手を過ぎて小口の里の中を通り、余野の里にぞ留行きける。血次第に細くなる。余野の里に小池與八郎といふ人あり。此の人新藏とわりなき知音なり。此の人の惣門にあげ格子あり。其側に鼠穴あり。件の血この穴に入りて術なし。人々奇異の思をなす。新藏心に思ふやう此事與八郎に隠すべからず。又事難かしく言ふべくにも非ず。人々には其處に待れ我身斗り小池に會ひ申さんと小池が家に行き尋ねれば折ふし小池宿にあり。あやしや日も漸々暮ると言ふ。新藏が言ふ様、若き人々我を誘ひてなぐさみに此のあたり嘯き餘り久しく對面不申候間若き人々は門に立たせ我のみ此へ御入しんとて使を立てしやうじけり。其の間にまうけ等拵へ語りつ、日も漸々暮るる時分に暇を乞て出にけり新藏小池名残りを惜しみ門の外まで送りけり。新藏小池を近付て本宮よりの事ども、ありのまゝに語りける。其の血穴に入りて先見へず。御身の中に不審なることありやなしやと言ふ。小池何れにても不思議なることと言ふ。小池宿に歸り女房のあかつきより禮に違ひたりと聞く。寢屋に行とう寢たる。姿はありてそれとも見えず。不思議やと思ひ夜の衣をひきのけて見るに人なし。蒲團の上に血こぼれ事の外なり。小池與醒めて暫らくありて邊を見れば寢屋の前に月の光を語る、窓あり其の障子の隙に件の血あり。猶不審に思ひ此處彼處見るに

障子のはづれに二首の歌あり。此の女の子男子一人あり。心孝にしていとく人に勝れたり。又此の子を秘藏して惣領をつがせける。代々を経て小池與八郎といふ。其事新藏與八郎に問はず與八郎新藏に語らず、誰知るともなしに世にかくれなし。美濃尾張の里々野のすゑ山の奥近きも此事人々の口づさみとなる。羽黒の里に新藏わりなき知音あり。此名大陽寺右京亮といふ。右京與八郎と知音なり。本宮にての次第我任里の人々かり催して血をとめ行。小池が惣門の鼠穴の中に此の血入りたる由語り右京亮誠に不思議なる事なり。其の方如何おぼしめすといふ。新藏曰くされば更にわかまへ難し。世の中の辻占を待つと言ふ。右京小池に問はんと思ひしが新藏が世中の辻占を待つと言ふを聞きて、是誠にてもあるべしと思ひ問はず。年月を経れども新藏語らず與八郎言はず。右京はもとより小池が惣領清くさわやかに育つ。世の中の人々あれこそ山姥の子よと言ふ。されどもこの子は知らず。漸々老行くほぎに母尋ねれども知る人なし。又母の里親類を尋ぬるに知る人なし。世の中の口づさみ、そらごとの中の誠なるべし。父に問はんもおこがまし。新藏と右京に問はゞやと思ひ羽黒の里に来る。己が思殘さず問ふ。こゝにて二人の人々ありのまゝに語る。此の子母の由來を聞きて是天のなせる夫婦なり。父に問はず母の苦掬をとはんと思ひ先づ一僧を供養して余野の里に寺を建てにける。是空母山徳蓮寺といふ。年忌の弔ひ又忌日の弔ひ違ふことなし。此の寺に不思議あり。忌日年忌の日出所なき僧承す來る。怪しめども言はず、歸るを見れども何時の間に歸るを知らず後にはこの僧の來るを待て經を讀み具供を供へける。小池が家繁昌して子供多し。惣領は代々與八郎といふ若與八郎山姥の彦なりと聞く、我二十斗の時に是與八郎七十斗。此さうし我家にあるべき物にてなし。新藏物事なぐりての人なり小池が家の重書他の人に見せず。右京の家の日記端書に細かに表

す。大方山姥のやうに書たり。尾張の國の人々は聞傳へ知りたるもあらんや。小池與八郎子孫堀尾山城守殿にて有之由、此家にて山姥の子孫といふ習たる由、右の條山城守殿浪人の物語とや。

攝州大阪玉作住

伊丹雲南

持主尾州丹羽郡稻木莊余野村吉田三之助

一、小池が筋目余野村になし。小池殿屋敷跡といふあり。

一、福富の筋目成海高橋に福富作左工門にて代々經る。

一、大陽寺の筋目羽黒に大陽寺六左工門とて代々百姓にて家を繼ぐ。右京亮は大山の城主小笠原和泉守の家人なりと云ふべし。此小笠原三郎右羽黒に來り大陽寺の一統呼出し益を賜ふといふ。

右傳記攝州大阪玉作西伊勢町伊丹雲南と申す醫師所持の書にて他へ不出。然處右雲南親類浪人して勢州桑名は有之右家の書所持の由を聞傳へ。余野村へ平六と申す百姓參宮の序右浪人宅へ立寄り條々を語り所望致し持歸り同村吉田三之助寫し申し候

右は拙者百姓ごもの申傳へにて御座候

丹羽郡余野村 地頭 三宅元右左門

千時延享元甲子歲 秋七月

如斯有之室原村大左工門寫置

右者穆天子傳汲冢紀古又書而虛誕殊甚然後世以爲傳奇家之鼻祖其餘逃異齊諧睽車剪燈或皆浮誇詭偉瞻炙人口不亦新奇哉是書世頗近虛妄雖然在村叟口碑至今歷々可記覽者採其新奇而亡論事之實否可也

延享紀元甲子夷則上浣

張藩書室史三川松平 雲 士龍書

何申不存候得共如斯御座候。右寫置申候。右是は尾州善師野日比野又右工門有之 當村賢吉郎と縁組にて此筋借用致し寫取候者なり。

天保四癸巳四月

日寫 賀地大左衛門來駕

二、やろか水

木曾川筋では昔から幾度も大洪水のためにおびやかされた。其の中でも「やろか水」といふのは今に至るまで大洪水の語り草となつてゐる。犬山邊ではこの事を貞享の頃であるといつてゐるが、地方によつては大同年間とも寛永六年であるともいつてゐる。この頃何でも雨の日が幾日も幾日も續いた。夜毎に木曾川堤に立つ里人に誰が呼ぶともなく、「やろか〜」と言ふ聲が聞へた。里人の中にこの聲に魅せられたやうに、「よこさばよこせ」と呼んだものがあつた。すると不思議にも其の時から水嵩が湧き出るやうに日増に増して遂には堤も切れ、村も水中に没して一面に濁水がみなぎつてしまつたといふことである。下野、上野、余野、前野といふやうな十三野がついでできたのはこの時であると

いひ、又七流八橋の口碑も今尙残つてゐる。この話は美濃の太田にも又犬山其の他にも残つてゐる有名な傳説である。

第五節 年中行事及休日

一、年中行事表

一 月

一 日 四方拜。神社参拜。各學校官衙拜賀式。一般は休日。

三 日 元始祭。

四 日 御用始。

八 日 各學校第三學期始業式。

二十日 初年兵入營(元は十日)

舊 一 月

一 日 主人又は其の家の若い男早朝起床して若水を汲み、惠方に向つて神々を拜み家内中して主婦の外揃つて氏神参拜をなす。主婦は家に在り豆木にて雑煮を煮る。氏神参拜を終り家の神佛へのお参り終れば揃つて雑煮を食ふ。凡て出し入れ其の他悪しきことを今日一日は戒める。

二 日 萬事の手始である。子供の書初め。商家の賣初め。一般人の買初め、農家はうち初め。

三 日 三日月とて此の日は夕方まで遊ぶ。門松を取る。昔は正月三ヶ日中に神官檀那寺庄屋等へ年賀にゆく風であつたが今は行はれず、親類はお節とて十五日までに往き來する。参賀者には年酒とて酒に煮豆數の子田作なごを出す。これは豆で數ある子が田を作る様にとの意味である。

七 日 七日正月と云つて朝粥に餅を入れて食べ一日中遊ぶ。別名七草祝ともいふ、これは「芹薺五行はこべら、佛の座すず菜、すずしろ、これぞ七草」と歌つて七草を切りこれを粥の中へ入れたからである。これは疫邪を防ぐ呪なりと傳ふ。

十四日 さんざやきと稱し正月飾りつけの門松竹、うらじろ、七五三繩神札等を神社にて(主に)やく兒童は書初めを焰の先へ出して高くあげる。高く上るほぎ手が上るといつて喜ぶ。火勢が下火になると餅をやき家にもち歸り家内一同分食する。これはこれを食べると夏病をしないと。又さんざやきの竹のふしを持ち歸りて家の屋根又は土中に入れると火災を防ぐと。又この日親戚知己より贈られし破魔矢羽子板を近隣への兒に分與す。

十五日 朝粥に餅を入れて煮る、この日は十五日正月として一般に遊ぶ。この朝青竹に豆木をそへて焚き爆音の大きいのを喜ぶ。そしてこの朝まで竹をやくことを忌む。

十八日 十八日粥といつて十五日残しておいた粥をませてたき惠比壽様に供へて食ふ。この日繼鹿尾へ初観音とし